

## 〈論文の要旨〉

平成 28 年度 京都市立芸術大学美術研究科 博士(後期)課程 油画専攻  
博士論文：「「足りなさ」を基準とする美術表現のあり方についての考察」

松井 沙都子

論者の主要な作品は、立体的な構造物によって住宅の中のような空間を仮設的に作り出し、鑑賞者によってその空間を体験されることを意図したインスタレーションである。構造物の壁面には真新しい既成品の壁紙を貼り、床面にはプリント合板製の床材を張っている。そこにあらわれる空間は、新しく建ったばかりの住宅の中を思わせる。そしてこの作品を展示すると、見慣れた日本の住宅の一部分を切り取ってきたようなものが整然と並べられているように見える。しかしこの作品の中に住人の姿はなく、家具などの調度品も置かれていない。簡素な構造物によって作り出される空間は、生活感が一切感じられない空虚なものなのである。

このような自身の作品から感得される質を、論者は「足りなさ」と言い表したい。「足りなさ」とは、一般的に満足に至らない不十分な状態を示す言葉であり、そのため否定的なニュアンスが強い。しかし、この「足りなさ」こそが、論者の作品の根幹をなす質なのである。本論の目的は、この「足りなさ」の正体が何であり、そして「足りなさ」を備えた論者の作品が、今の時代に制作される美術作品としていかなる意義があるのかを明らかにすることである。

そこでまず、造形的な観点から「足りなさ」を考察するために、先行する作品を取り上げ、どういった作品のどのような点に見出されるのかについて検証を行う。第 1 章では、論者の作品と造形的「足りなさ」の特徴に近い竹岡雄二 (1946-) の《ショーケース B》(1996/2000) を、ドナルド・ジャッド (Donald Judd, 1928-1994) の《無題》(1977) と比較し、竹岡の作品が作り出す空間には展示されるべき何かが欠落した状態にあるということ、つまり「足りない」状態にあることを明らかにする。

第 2 章では、このことを踏まえ、竹岡の作品における「足りなさ」がどのように生じているのかを造形的な観点から検証する。竹岡の作品はひとまとまりの構造物の中に、何かが置かれる可能性のある空間を作り出しているのであり、そのことが「足りなさ」を見るものに感得させる条件であることを明らかにする。

次いで、論者の美術作品における「足りなさ」について考える上でもう一つの鍵となる、感覚的「足りなさ」について論じる。第 3 章では、感覚的「足りなさ」が得られる事例として無印良品を取り上げ、商品と広告、そしてデザイナーによって語られた言葉

を分析し、そこに感覚的「足りなさ」が生じる根拠を探る。こうした考察を通じて、無印良品は「空っぽの器」のようなもの」という明確なコンセプトによって、利用者が様々に活用することが可能な商品や、多様な解釈が可能な広告を作り出しており、そのことが漠然と何か欠けたような印象を生んでいることを明らかにする。

第4章では、第3章で述べたことをより深く考察し、感覚的「足りなさ」はどのような条件において得られるものであるのかを明らかにする。感覚的「足りなさ」は、無印良品の「空っぽの器」のようなもの」から、利用者との関係性を排除して、単に「空っぽの器」という不完全な存在と捉えた時に生じることを指摘する。このことは通常、無印良品を利用する観点からは見過ごされるものであるが、あえてここで着目するのは、この感覚的「足りなさ」が、1990年代の日本の社会に蔓延していた漠然とした物足りなさの感覚と深く関連するためである。この物足りなさは、1990年代の日本に顕著なもので、大澤真幸（1958-）が述べたように、多くの人が満たされた生活を送るようになって久しい時代において、なんら欠如のない暮らしは、欠如状態そのものの欠如を招き、生そのものを虚しくする。そのため、欠如状態は排除されるよりもむしろ求められるべきものとなる。こうした時代において、あらかじめ「空っぽの器」のようなもの」として作られる無印良品は、損なわれた欠如状態を代替するものとなる。感覚的「足りなさ」は、本来利用者と無印良品との関係性においては、通過点にすぎない。しかしそれは、論者自身が経験した1990年代の日本という社会において最も研ぎ澄まされていた感覚と、そこから生じた問題意識に基づいている。

第5章では、論者の作品が造形的「足りなさ」と感覚的「足りなさ」の両方を有することを明らかにする。論者の作品は、人の姿や生活の痕跡を全く含まない、空っぽの住宅のような空間を提示するものである。竹岡の作品のように、展示空間の中に一定の枠組みを提示することで、そこに何か置かれる可能性を生むと同時に、そしてその中にあるべき対象を含まないという、造形的「足りなさ」を持つ。また、論者の作品は、住宅のような見た目とともに、人一人がその中にゆったり収まることのできる最低限の面積を備えており、鑑賞者の身体との関係可能性に開かれている。しかし実際には作品全体の構造ゆえに、鑑賞者がその中に立ち入ることはできないようになっている。そのため論者の作品は、無印良品のように、他者との関係可能性に開かれていながら、それが成立しない状態に置かれているという点で、感覚的「足りなさ」を生じさせる。このように論者の作品には、造形的「足りなさ」と、感覚的「足りなさ」の、二つの性質が備わっているといえる。その意味において論者の作品はモデルハウスに近い。モデルハウスとは、住宅販売を目的とした原寸大の住宅のサンプルであり、現在、日本国内の住宅展示場などに多数設置され一般公開されている。モデルハウスの内部には、人が住むた

めに必要な設備や内装が整えられている。しかし、当然ながら実際にそこに住んでいる人はいない。また、来場者はその空間に立ち入ることができるものの、そこを実際の住まいとすることはできない。モデルハウスは居住可能性を示しつつ、その可能性が果たされないのであり、その意味において論者の作品と同様に、造形的「足りなさ」と感覚的「足りなさ」を兼ね備えている。

終章では論者の作品が造形的、感覚的「足りなさ」を併せ持つことによって、どういった意義が生じるのか明らかにする。竹岡の作品に見られた造形的「足りなさ」は、視覚的な特徴から読み取ることのできる造形的な性質であるため、他にも例を探ることができる。一方で感覚的「足りなさ」は、第4章で述べたように1990年代の日本の社会に特有の感性と結びついている。したがって、論者の作品は、この造形的「足りなさ」を備えた美術作品の一つであるとともに、感覚的「足りなさ」によって現在の日本において制作される意義を持つ。そして論者の作品は、モデルハウスとの関わりにおいて、より鮮明な輪郭を得る。論者の作品が提示する空間は住宅らしい見た目を持つにもかかわらず、モデルハウスのように新しく清潔な状態が維持される。それは、現代に生きる人に美しいと感じられる住宅の一つのあり方に重なる。ただし、住宅という用途に開かれた存在が、このような状態を維持することができるのは、展示空間という特別な場所に設置されるときだけである。美術作品の展示空間では、現代に特有の感性によって美しいと感じられる住宅の空間は、モデルハウスとしての用途からも切り離された状態で、ただ見つめる対象としてのみ存在する。論者の作品は、「足りなさ」を備えることによって、このような状況を作り出している。